

「人間であるということは・・・」

これまで私達はアダム、エバ、カイン、ノア、ハム、ノアの時代の人々、バベルの時代の人々とみてまいりました。ここまでで創世記の11章です。お気づきの方もいるかと思いますが、この創世記の11の章の間に人類は三度、試みを受けているのです。そう、人間が神の前に正しく生きることができるかという試みです。

最初のテストは何だったと思いますか。そうです、最初のテストはアダムに神様が与えた自由意志をアダムがどのように行使するかということでした。アダムは食べてはならないと禁じられた木になる実を前にそれを「食べない自由」、そして、それを「食べる自由」がありました。結果としてアダムはその実を食べ、エデンの園から追われるように出ていきます。これが一つ目の試みです。

二つ目はノアの洪水でした。最近、お話ししたので覚えていらっしゃる方も多いことでしょう。邪悪な時代、ノアは神の前に正しく生きた人でした。ゆえに神様はノアに箱舟を創るように命じました。なぜ、箱舟を創るのか、その意味もノアには告げられたことでしょう。ノアはそのことを彼が暮らしていた地域の人達に告げたことでしょう。箱舟の建築には長い年月がかかりましたから、その間にノアの言葉を信じ、それに共鳴して共に箱舟造りに加わる者がいてもおかしくありません。しかし、結果として誰一人としてノアの家族以外に彼の言葉に耳を傾ける者はいませんでした。結果としてこの箱舟に入らなかったものは失われてしまいました。これが二つ目の試みです。

三つ目はバベルの塔の試みです。洪水により人類は一度、リセットされ、その新しい始まりは神の前に正しく生きたノアとその家族から心機一転、始まりました。しかし、この洪水から時をそう経たずして人間は早くも天に届くようなバベルの塔を建て始めました。そう、天に届くようにとは自分の力を誇示し、あたかも自分が神と同等のようなものであるとういう人

間の心のあらわれでした。結果として彼らの言葉は互いに通じ合わなくなり、人は全地に散らされていきます。これが三つ目の試みです。

こうして創世記を整理して見ますと、聖書がよくわかってきます。そうです、人類は三度、この試みに失敗したのです。私達が「仏の顔も三度まで」と言いますように、「三」という数は意味のある数字です。私達は失敗はします。そして、もう二度と同じ失敗は繰り返さないと誓いつつも、私達は再度、失敗します。その二度の失敗により痛い思いをして、そこから学習し、反省していながらも私達は三度、失敗することもあります。そう、それが人間というものです。「仏の顔も三度まで」とは、多めに見て三度までは失敗は受け入れようではないかという言葉です。しかし、それ以上の失敗はもはや受け入れがたいということです。

人間の歴史を記録する聖書において人はわずか11章で、その三度の失敗に至ってしまったのです。いくらなんでも早すぎます。創世記で最初の失敗がなされ、次の失敗は時を経て士師記で起こり、三度目の失敗は列王記あたりならまだしも創世記が始まってすぐに我々人間は立て続けに三度の試みを使い果たしてしまった、これが人間です。

それでは聖書は創世記11章で終わりなのでしょうか。いいえ、創世記はその先も続くのです。そう創世記の12章があるのです。そう、創世記の12章といえば何ですか。あたかも場面ががらりと変わるかのようにしてこんな言葉で創世記12章は始まるのです。

1時に主はアブラムに言われた、「あなたは国を出て、親族に別れ、父の家を離れ、わたしが示す地に行きなさい。2わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大きくしよう。あなたは祝福の基となるであろう。3あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。地のすべてのやからは、あなたによって祝福される」。4アブラムは主が言われたようにいで立った。ロトも彼と共に行った。アブラムはハランを出たとき七十五歳であった。

これまで三度、人類は失敗をしてきました。その最後の失敗はバベルの塔によって、人間が異なる言語をもって世界各地に散っていったということです。後味の悪い失敗です。それまで少なくとも互いの意思疎通ができていたのに、以降、彼らは互いに意思疎通ができなくなってしまいました。ここに次につながるような希望を見出すことは難しく、それはさらに人間関係に混乱をもたらすものであると誰もが思うことでしょう。コミュニケーションで解決できる問題も中にはあるでしょうが、そのコミュニケーションすらもてなくなったというのですから、問題はさらに大きくなっていくだろうと私達は悲観的になります。そう、それはマイナスからの出発なのです。

このような緊迫した状況の中、神様はノアに目を注いだように一人の人に目を注ぎました。そう、それがアブラハムでした。私達がまず驚くことはこのアブラハムはその時、75歳であったということです。私達には常識というものがあり、その常識は私達の経験を通して確立されていくものですが、この神の選びは私達の常識を超えています。すなわち、神様が問題が山積しているような時に注目したのはある意味、人生の諸々のはたらきからリタイアしているようなアブラハムだったということです。

しかもそのアブラハムに命じられたことは「わたしが示す地に行きなさい」というもので、さらに驚くべきことは「わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大きくしよう。あなたは祝福の基となるであろう。地の全ての輩は、あなたによって祝福される」というものでした。

歳をとりますと若い時にしていたような活動はできなくなります。肉体的にもそうですが、気持ちということに関しても腰をあげて、旅装を整えてどこかに行こうという気持ちが失われていきます(例外の方達もいますが)。アブラハムがそのような年齢のただ中にいるということを神様は百も承知で「わたしが示す地へ行きなさい」と言われたのです。

ノアの場合は『ノアはその時代の人々の中で正しく、かつ全き人であった』(創世記6章9節)ゆえに、神様が彼に声をかけたということが分かります。しかし、アブラハムの場合はなぜ神様が彼を選ばれたのか、その理由は聖書に書かれていません。しかし、その限られた文章の中で分かることは『アブラムは主が言われたようにいで立った』(4)ということで、ここから分かることは、彼は自らの身体的な状況にもかかわらず、行く先が分からずとも神を信じて出ていったということでありました。神様はそのような心をもっているアブラハムを見て、彼を選ばれたのかもしれませんが。

こうしてアブラハムはその妻サラと弟の子ロトと共に住み慣れた地を出て、彼らはカナンに着きました。そう、カナンと聞いて、思い出しませんか。そうです、先週、お話ししましたノアの息子ハムの子孫が暮らす土地です。その土地に来た時に神様はアブラハムに約束されたのです。『わたしはあなたの子孫にこの地を与えます』(創世記12章7節)。

そう、こここそが後にイスラエルの民にとりまして「約束の地」となる場所で、後に出エジプトしたモーセとイスラエルの民が目指した土地です。先週のメッセージを覚えていらっしゃるでしょう。カナンは多くの産物を生む肥沃な土地でしたが、そこに住む人達はノアの末っ子ハムの子孫で、その様は墮落しており、神様はモーセに向かってその土地を征服し、さらにそこに既にある彼らの慣習に従ってはならないと語りかけました。

そうです、アブラハムになされた約束の言葉どおり、カナンはこうしてアブラハムの子孫に与えられたのです。そして、このカナンの地こそが現在のイスラエルなのです。「国土」とか「土地」について抱く思いは、その民族により異なるかと思いますが、ユダヤ人が、パレスチナ人があの猫の額ほどの土地に寄せる熱烈な思いというのは、このアブラハムになされた神様の約束にまでさかのぼらないと分からないことなのです。

さて、アブラハムとサラはこのカナンからさらにネゲブに移住しますが、そこで飢饉にあいます。神の言葉に従って出てきました彼らでありますのに、彼らは早速、生きるか死ぬかというような不安点な生活に直面するよ

うになりました。神の言葉は私達を安泰な道へと導くということばかりではありません。この飢饉に対してこの一行は異教のエジプトに逃れていくのです。

いよいよエジプトに入ろうとする時にアブラハムはサラに言います『わたしはあなたが美しい女であることを知っています。それでエジプトひとがあなたを見る時、これは彼の妻であると言ってわたしを殺し、あなたを生かしておくでしよう。どうかあなたはわたしの妹だと言ってください。そうすればわたしはあなたのおかげで無事であり、わたしの命はあなたによって助かるでしよう』(創世記12章11節、12節)。

この時点でアブラハムとサラの歳の差はおおよそ10年ありますから、彼女はこの時に65歳ほどであったと思われれます。決して若いとは言えない歳ではありますが、彼女は本当に美しい人だったのでしよう。実際に彼らがエジプトに入りますと、サラを見た人達はその美しさに驚き、彼女のことはエジプトの王パロの高官の目にもとまり、それがパロの耳にも届き、サラはパロの家に召しいれられました。そのことゆえにアブラハムはパロから厚遇を受け、多くの家畜、男女の奴隷を得ました。

当時はまだ人と人との交流が今のように広いものではなく、同じ民族の中で夫婦となる者が普通の時代でした。実のところこのサラも実際にはアブラハムの異母姉妹なのです。そのような意味では確かにアブラハムの妹と言うこともできるのですが、その時の現状ではこの二人は確かに夫婦なのですから、アブラハムにとりまして「サラは自分の妻だ」と説明することが一番、妥当なことでありましよう、しかし、アブラハムは自らの保身のためにサラとの本来の関係を告げることをしなかったのです。

このことについて私達は困惑します。神様から声をかけられて、それに従って高齢でありながらも、出てきたということ、なんという信仰の持ち主だろうとアブラハムのことを思いつつ、突如、その彼がこのようなことを言い出すのですから。たとえば私達が夫婦でどこかの国に移住したとします。しかし私の悩みは自分の妻が美しすぎるということで、そのためにそ

の国の権力者がきっと自分の妻を是が非でも召し抱えようとするのではないかと心配になります。その時、私にとっての心配は妻がどうなるのかということではなく、そのことで自分が殺されてしまうのではないかという心配であるということ・・・。それゆえに妻に向かい「俺は死にたくないから、頼むよ、ここはどうか俺の妻だとは言わずに、俺の妹と言ってくれ」と言います。そして、妻はその土地の権力者の元に連れていかれるのです。言うまでもなく妻の側からすれば、この言葉は「あなたの命が助かるのなら、私がどうなってもかまわないのね」ということだということとは言うまでもありません。

そして、さらに私達が創世記を読み進め、20章にいたりますとな、なんと私達の目を疑うような言葉に再び出会います。『アブラハムはそこからネゲブの地に移って、カデシとシュルの間に住んだ。彼がゲラルにとどまっていた時、アブラハムは妻サラのことを、「これはわたしの妹です」と言ったので、ゲラルの王アビメレクは、人をつかわしてサラを召し入れた』(創世記20章1節—2節)。

そうです、彼が妻サラを妹だと言ったのは一回ではなく、ここでもそうしているのです。その時も彼らが土地から土地へと移り住んでいる時であり、アブラハムが妹だと言ったために、サラはゲラルの王のもとに連れていかれてしまったのです。状況はエジプトの時と同じでしょう、アブラハムは自らの保身のためにあの時と同じことを言ったのです。正直に告白しますが、私は過去に、私のことを妻の父親だと思っていたという人に複数、お会いしたことがあります。とても複雑な思いが心に残りましたが、自分を守るために「妻は私の娘だ」とか「私の妹だ」と言ったことはさすがにありません。もし、そんなことをすれば私達、夫婦の関係はとても危険な状態になることでしょう。

主にある皆さん、アダム、エバから始まり、その息子カインとアベル、ノアから始まり、その息子達から広がった子孫たち、ノアの時代の人々、バベルの時代の人々、これらの人間の有様を見て、私達はここまでやってきましたが、ここにきてこのアブラハムのこの姿です。

このようなことがありながらも、後にアブラハムは甥のロトと土地を分け合う時に寛大な心を示し、彼が好む土地をまず先に選ばせています(当時の習慣であるのならその権利は年長者であるアブラハムにありました)。ソドムとゴモラが滅ぼされるというような時には神にすがりつくようにその邪悪な町に住む者達のことを思い、彼らのためにその救いを神に何度も懇願します。せっかく与えられた一人子イサクを生贄として捧げよという神の言葉に一言も反論せずにその命に従います。まさしくアブラハムの内には神の前にあるべき人間の最も素晴らしい姿と同時に聞く者があきれ返るような姿が混在していたのです。

アブラハムが二度も自分の保身のためにサラを妹だと言ったこと、このことがどのようにこの夫婦に影響を与えたかは分かりません。しかし、おそらくこれらのことはこの夫婦の間に暗い影を落としたことでしょう。このことはあのアダムがエバに責任を転嫁した時にとても似ています。そう一番、身近にいる者の間に問題は一番多く生じるのです。

さらに彼らはこのことだけではなく、神様が彼らに子を与えるという約束をしているにも関わらず、信じぬくことができずに妻サラの勧めにより、アブラハムの家で仕えているエジプトの女ハガルをしてイシマエルという男子をもうけたということ、後に正妻サラにもアブラハムの子が与えられ、サラはハガルとイシマエルが自分の前にいることが目障りとなり、この親子を家から追い出すというようなこともしているのです。このようなこともこの夫婦の関係に何かしらの影響を与えたことでしょう。

今日、この世界にはユダヤ教、キリスト教、そしてイスラム教があります。これらの宗教がこの世界に与えている影響は言うまでもなく大きいものです。そして、この三つの宗教の全てがこのアブラハムは我々の信仰の父だと言っており、皆がそれを誇りとしているのです。しかし、それにしても彼はあまりにも人間臭いのです。アブラハムには失礼ですが、あまりにも頼りないし、自己中心に見える一面も彼は持ち合わせているのです。

このメッセージを準備しながら、いったい聖書に書かれている人間っていうのは何なのだろうかと思ひめぐらし日々を過ごしました。そうしましたら、分かってきたのです。自分は「聖書に書かれている人間っていうのは」なんて言っているけれど、その人間の姿はまさしく「今の私達の姿」と同じではないかと。

そう思いながらテレビを見ればこれからこの国のリーダーとなるという人が女性蔑視の言葉を使ったと非難され、個人的なメールを公務に使用したと弾劾され、海の向こうに目を向ければ土を盛るはずだったのに盛られていないなんてことが明らかになり、一体、誰の仕業なのかと騒ぎが起こり、「二度と悪い言葉は使わない。そうしないと飛行機を落とすという神の御告げを受けた」という一国のリーダーが、すぐその後に「こんな冗談を信じている人は愚かだ」とまた暴言を繰り返し……。このようなことを取り上げればきりがなく、否、そんなことを持ち出すまでもなく、このようなことは私達のすぐ近くにいくらでもあるのです。

先月、私は夜、飛行機に乗ってサンディエゴに帰ってくることもありました。夜、サンディエゴに着陸することは珍しく、しばし、窓から外の世界を見ていました。その光景はまさしく闇夜にばらまかれた宝石のような光景で、オーシャンサイド辺りからダウンタウンに至るまでの海外線は所狭しと光で埋め尽くされていました。そんな小さな明かりの一つ一つは一軒一軒の家々から放たれている光なのでしょう。そんな家々を上から眺めながらしみじみ思ったのです。あの明かりの下で、そこにいる人達は今、何を見て、何を考え、何を語り、何をしているのかなと。

そう、アブラハムがエジプトに下る時、ネゲブに下る時、妻に言った言葉も、もちろん当時は電気などはありませんが、荒野に灯された焚火の明かりに照らされながら妻に打ち明けたのかもしれない。そんなアブラハムとサラの間になされた言葉、アダムとエバの間に取り交わされた会話、カインとアベルの間になされたこと、ソドムとゴモラの日常、バベルの塔の建築現場の光景、これらの類の事は今、眼下にある家々でも起きているこ

とだということであらためて思わされたのです。そう、これが私達人間であり、私達の住む世界なのだとして聖書は今も私達に語り続けているのです。

確かにこれからもアブラハムは私達の信仰の父でありましょう。しかし、これまでお話ししてきましたようにその信仰は完全なものではありませんでした。しかし、聖書はその信仰を完成させたお方がいると書き記しています。

『信仰の導き手であり、またその完成者であるイエスを仰ぎ見つつ、走ろうではないか。彼は、自分の前におかれている喜びのゆえに、恥をもいとわないで十字架を忍び、神の御座の右に座するに至ったのである』(ヘブル12章2節)。

アブラハムの信仰は完全ではありませんし、彼は信仰の導き手ではなく、その完成者でもありません。彼とて私達と同じように時には不信仰に陥るような人間です。アブラハムは信仰と共に前に進みつつ、また時に戻りつつ、その人生を歩み続けました。そのような意味で彼はその信仰の道のり、すなわちプロセスを一步一步、歩んだのです。その生涯に評価すべきものがあるとすれば、たとえ彼が失敗しても、不信仰に陥っても、彼は神を仰いで前に進んだということです。ゆえに彼は信仰の父なのです。

アブラハムの時代にはイエス・キリストはまだいませんでした。しかし、さいわいなことに私達はイエス・キリストの後の時代を生きる者であり、聖書に残された「信仰の導き手であり、またその完成者であるイエスを仰ぎ見つつ走ろうではないか」という言葉と共に、文字通りイエスを仰ぎ見つつ、信仰の完成を目指して、これからも歩み続けることができるのです。

創世記23章にはアブラハムの妻、サラが召された歳が記録されています。意外に思われるかもしれませんが、聖書において一人の女性が何年生きたかと、その年数が記録されているのはこのサラだけです。彼女が素晴らしい女性だったからと言いたいのですが、そうとは言い難く、彼女にも色々な問題がありました。彼女の死について聖書はこう書いています。

1 サラの一生は百二十七年であった。これがサラの生きながらえた年である。
2 サラはカナン地のキリアテ・アルバすなわちヘブロンで死んだ。アブラハムは中にはいってサラのために悲しみ泣いた(創世記23章1節-2節)。

当時、人は十代で夫婦になったと言われています。故に彼らがいくつの時、結婚したかは定かではありませんが少なくともこの夫婦は100年以上共に暮らしたのです。その妻が先に召されました。そう、サラはその与えられた人生を全うしたのです。ということはすなわち、サラの信仰生涯も終了したということです。この妻の死を前にしてアブラハムは悲しみ泣きました。

アブラハムとサラの間にも色々なことがあったことでしょう。お話ししましたように、いつも夫婦円満というわけでもなかったでしょう。彼らの人生がどのようなものであったのか、私達は聖書に記録されている事柄以外は知りません。まさしく神と彼らのみぞ知る人生です。ここに記されているアブラハムが「悲しみ泣いた」という言葉はとても強い表現だといえます。そう、彼はまさしく自らの半身を失い、悲しみ、激しく泣いたのです。

夫婦としての歩みの中で直面した諸々の危機。しかし、その最後の最後にアブラハムはそんな妻の死を悲しみました。二度、サラを傷つけるような言動をしつつも、彼らは共に歩む信仰の旅路の中で再び、その絆を取り戻してきたのかもしれませんが。このサラの死について告げる言葉の直後にはこのように書かれています。

3 アブラハムは死人のそばから立って、ヘテの人々に言った、4「わたしはあなたがたのうちの旅の者で寄留者ですが、わたしの死人を出して葬るため、あなたがたのうちにわたしの所有として一つの墓地をください」(創世記23章1節-4節)。

彼は先に召されたサラを前に自分は旅の者であり、寄留者であるということ伝え、サラのための墓地を備えます。そう、この時は神様から声をかけられてから62年が経っています。あの時から彼らの人生は信仰の旅路となったのです。そのことをアブラハムはこのような時でも、よくよく理解していました。そうです、アブラハムは自分が信仰の成長を目指す旅の

最中にいるということを知覚していたのです。そして、このアブラハムもこの時から38年後、175歳で召されていきました。その時に彼の信仰の生涯は終わりました。

彼らの人生はアブラハムが二度、サラを妹と言ったということだけでは説明できない人生です。私達は彼がエジプトに下る時、ネゲブに下る時、まず先に口トに土地を選ばせたということ、ソドム、ゴモラのためにとりなしたこと、イサクを捧げたこと、これらの事全てを含めて彼を我らの信仰の父と呼ぶのです。否、聖書に記載されている彼らを知る術となる言葉はあまりにも少なく、私達が知りえない信仰の旅路を彼は生涯かけて続けたのです。それら全てを込みで私達は彼を信仰の父と呼ぶのです。

こんなバッチがあるのをご存知ですか。私にもこのバッチが必要のようです。皆さんはいかがでしょう。でも、皆さんにこのバッチが必要かどうか、それを聞く前にこの奇妙なアルファベットの意味を知らなければなりませんね。

P/B/P/G/I/N/F/W/M/Y

Please Be Patient, God is not Finished With Me Yet.

「どうかご忍耐を。神様はまだ私を完成させてはいませんから」

私達はアブラハムが人として素晴らしいものを持ち合わせ、同時に、悪しきものをも持ちつつも、信仰の旅人として、信仰の寄留者として歩んだように、私達も信仰の完成者であるイエス・キリストを仰ぎ見つつ、この道を今も歩んでいるのです。私達の道のりは互いに異なります。ある方は今、息をきりながら上り坂を登っているかもしれません。ある方は平たんの道を口笛吹いて歩いているかもしれません。それが上り坂であっても、平坦な道であっても、私達は信仰と共に完成を目指して、この道を歩き続けます。皆さんのそんな旅路が主にあって守られ、いかなる道を歩んでいても信仰ゆえにそこに感謝が生まれるような収穫多き旅路となりますように祈り、願っております。お祈りしましょう。